

関係重視型・民主型リーダーが多良間島の観光に与える影響

～柳岡秀二郎さんへの聞き取り調査から～

馬橋 萌音
HS30-0058G

目次

- 1 はじめに
- 2 論文課題と仮説
- 3 ふしゃぬふ社会
- 4 観光カリスマに関する文献調査
- 5 多良間島の概要と聞き取り調査
- 6 考察と結論
- 7 参考・引用文献

1 はじめに

筆者が大学 2 年生の頃、所属するダイビングサークルで後輩への指導力や安全管理能力を向上させるため、沖縄県宮古郡多良間島にあるダイビングショップ「郷土マリンサービス JAWS II」で夏休みの約 1 ヶ月間、研修に就く機会があった。多良間島は「タラマブルー」と呼ばれる透明度の高い青い海と綺麗な砂紋、手付かずの自然があり、多くのダイバーに人気となっている。そして代表の柳岡秀二郎さん（以下秀さん）をはじめとする JAWS II スタッフの人のよさや、島民の温かさがリピーターを増やした要因だろうと、この 1 ヶ月研修で感じた。

毎年、ダイビング雑誌『マリンダイビング』で行われる人気投票において 2021 年発表のランキングでは、多良間島は国内ダイビングエリア部門（沖縄エリア）において 6 位、郷土マリンサービス JAWS II は国内ダイビングサービス部門（沖縄エリア）において大手のショップに続いて 4 位、JAWS II の代表である秀さんは国内ダイビングガイド部門（沖縄エリア）で 2 位を獲得するなど、小さい島であり観光試行錯誤期¹ながらも観光客からの支持が非常に高い。

コロナ禍現在も、お店を何度も休業し続けている秀さんに向けて、客が自らマスクや手作り T シャツ、寄付金などの支援を行ったほか、SNS 上で数多くの温かい応援のコメントが送られている。また現在、全員島外出身者である JAWS II スタッフに対する島民の信頼も厚く、年中行事を共に作り上げたり、秀さんは多良間島の観光協会の副会長に選ばれるなどしている。ここで筆者は、ダイビングショップができるまで観光業がほとんど行われてこなかった多良間島で、なぜここまでの観光客の満足と島民の信頼を両立させることができたのか疑問に思い、本論文の執筆に至った。

2 論文課題と仮説

第 1 章では論文課題と仮説、方法論について述べている。本論文では、多良間島の観光において、観光客の満足と島民の信頼を両立できているのは、島でダイビングショップを営む柳岡秀二郎さんがいたからではないかという問題意識のもと、「秀さんという関係重視型・民主型リーダーは、多良間島の観光における“ふしゃぬふ社会”に影響を与えた」という仮説を設定した。調査方法は、秀さんに対して半構造化面接法によるインタビューを行い、ライフストーリー分析及びドキュメント分析を行った。

3 ふしゃぬふ社会

第 2 章では「ふしゃぬふ社会」について考察・定義した。多良間島に古来より伝わる方言で「共感や共助によって生活を和やかに過ごす」という意味を持つ「ふしゃぬふ」を用い、「無理な島内開発を避け、大切な伝統文化、自然資源を保

¹ 導入期→試行錯誤期→成長期→成熟・飽和→衰退

全していくことで、住む人、訪れる人が融合し、双方にとって魅力的な島を、「ふしやぬふ社会」として考えてみた。「ふしやぬふ」という言葉は、冠婚葬祭など島内の様々な場面において使われるが、本論文で「ふしやぬふ社会」は、観光場面における島内の状況を考察する際に使用した。

4 観光カリスマに関する文献調査

第3章では国土交通省が選定した「観光カリスマ」(公式に国に認められたリーダー)について、文献調査を行った。福菌(2002)の沖縄県伊平屋島における観光基盤の確立事例と、井手(2017)の大分県別府市のオンパク(温泉泊覧会)におけるリーダーの発達事例から、秀さんと彼らはリーダーとして類似の行動をとっているが、彼らにはある「村・町おこしがしたい」という想いが秀さんには無かったこと、しかしながら、「持続可能な観光」や「ふしやぬふ社会」の実現のためにはそれを主導する「リーダー」が不可欠であったことを本章では説いた。

5 多良間島の概要と聞き取り調査

第4章では沖縄県や多良間島の概要・地域特性について、年代別人口構成や地勢・アクセス法、主要産業や経済活動別市町村内総生産、島の歴史的文化的成り立ちなどを述べた。

第5章ではインタビュー調査についてまとめた。今回の調査から、秀さんが島民と観光客の間に立ち、双方それぞれに「受け入れる側」と「来島する側」の意識を持たせることで、島の自然や島民の生活にストレスを与えず、観光客にも過ごしやすい島づくりに貢献してきたことがわかった。また過去の失敗に学び、自分や客の利益よりも島第一に行動することの大切さに気づいたことで、本来やりたいことではない島の会議などにも島のために取り組み、多くの信頼を引き寄せてきたことがわかった。これまで役職としての「リーダー」は断ってきているが、観光が自然を収奪するような誤った道に行かないようにする「守りの立場」として行動するこ

とで、島の観光に大きく影響を与えてきたことが分かった。

6 考察と結論

第6章では考察を述べている。秀さんは全国の「観光カリスマ」たちと比較しても同様の行動をとっているが、大きな違いは最初から村おこしをすることが目的であったかどうかだと考えられる。しかし、ビジネスを成功させるには島を第一に行動しなくてはならないほか、秀さんが来るまで観光と呼べるものがほとんど無く、観光インフラが整っていなかったことなどから、秀さんは主導的に振舞わなくてはならなかったため、リーダー職に就いていなくてもその中で次第に権限が大きくなっていったと考えられる。また意図せず得た権限とその過程が、結果として、観光業に就きながらも島の自然を守り、島民と観光客の双方にとって魅力的な島、いわゆる「ふしやぬふ社会」づくりに貢献できたのだろう。

第7章では多良間島の観光において、離島という閉鎖的な空間において、島外出身者でありながらも、島最大の観光事業を営んでいることから、秀さんは、権限を持つ関係重視型・民主型リーダーとして、自分のビジネスを島民に受け入れてもらうために行動したことで、結果として、伝統的な島の生活と観光のバランスをうまく保つ「ふしやぬふ社会」に貢献できた、と結論を出した。

7 参考・引用文献

- ・井手拓郎, 2017, No.2 日本観光研究学会機関誌 Vol.28 『観光まちづくりに関するリーダーの発達プロセスに関する研究—別府ハットウ・オンパクのリーダーを対象に—』, 日本観光研究学会
- ・福菌宜子, 2002, 史料編集室紀要 第27号 『沖縄県伊平屋島におけるブルーツーリズム型観光地の形成』, 沖縄県教育委員会